
あざみ館の三姉妹

iris Gabe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あざみ館の三姉妹

【Nコード】

N6189I

【作者名】

iris Gabe

【あらすじ】

一通の手紙にみちびかれ、山奥の洋館にやって来た私を待っていたのは……。

1・手紙（前書き）

目次

1	手紙
2	あざみ館
3	晩餐
4	実母
5	塔
6	遺言
7	毒
8	階段
9	日記

1. 手紙

手紙が投函されたのは、今年一番の猛暑だった七月のとある昼下がりのことである。亜麻色の和紙でつくられたその長方形の固まりからは、どことなく異様な雰囲気が放出されていた。私は手紙をポストから取り出して、手に取ると、二三度ひっくり返してみた。封筒の表面に施された浮彫りの精巧な図柄は、どこかで見かけたような可憐な一輪の花である。

なんで植物の絵が……？

そんなとるに足らない疑問を抱きつつ宛名に目を移すと、達筆な行書文字で『親展 錦織摩耶様——』と記されていた。おそろおそろの封をあけてみる。中から厚手の便箋が姿を現した。

『拝啓 急なお知らせで、まことに恐縮です。

このたび、群馬県上野村の五月女財閥のお屋敷（通称 あざみ館）にて、貴女の実母である五月女摩由姫様のご遺言が披露されます。

故人のご意向で、貴女と貴女のご姉妹が二十歳になられるこの夏まで、遺言状の中身は凡てが伏せられてきました。このたびの公開により、はじめてその全貌が明らかになります。

ここでご注意いただきたいことがあります。もし、貴女が何らかのご事情で公開の場にご出席されないと、その時点で貴女の相続の権利は一切合財が剥奪されてしまいます。これは故人の意によるものでありまして、何とも致し方ないものでございます。

それ故に、摩耶様には何卒この場にご出席を賜りたく、不躱ながら、このように連絡をさせていただきました。

八月六日午後二時、群馬県高崎市JR高崎駅前の高崎ロイヤルホテル一階ロビーにてお待ち申し上げます。事態は数日に及びますので、衣類などのご用意をされるようお勧めいたします。尚、本件に関する交通費、宿泊費や、お仕事の休止などによる貴女が被るあら

ゆる損害は当財閥で完全に保証いたしますので、必ずやご出席されるよう重ねてお願い申し上げます。 敬具

五月女財閥顧問弁護士 松川信太郎——」

実母、五月女摩由姫……。私の眞実のお母さん？ 突然の飛報に私は呆然とした。

かつて私には母がいた。錦織須美代——。母は脳梗塞で昨年他界した。今、私は一人で暮らしている。父親の記憶は全くない。本音をいえば私は気づいていた、錦織須美代が私の実母ではないことに。

母が初めて病院に運ばれた時のことだ。担当の医師が、母の血液型がO型であると教えてくれた。私の血液型はAB型だ。そもそも私たちの容姿はそんなに似ていなかった。

にもかかわらず、私たちは親子の役割をその後もずっと演じきってきた。

「摩耶さん、悪いけどちよつとお遣いに行ってきたもらえない？」不意に、亡き母須美代の懐かしい声が聞こえた気がした……。

母はいつも私のことを『摩耶さん』と呼んでいた。私が成長していく様を、母はいつも嬉しそうに見守っていた。もちろん、私はそんな母のことが好きだった……。

その母が亡くなって生活費に困窮した私は、大学を中退して近所の小会社で事務のパートに携わっている。もちろん、身寄りのない私にとって遺産の相続はありがたい話であるし、実の母がどんな人物なのかを知りたいという願望も手伝って、私は即座にこの旅行を決意した。

高崎ロイヤルホテルは、高崎駅西口の駅ビルに面した大通り沿いに建てられた豪華なホテルだ。約束の時刻にはまだ三十分以上ある。

「一先ず、座つて待つとしよう。」

週末のロビーは予想外に多くの人が往来している。しばらくすると、アタッシューケースを抱えた長身の青年が、隣のソファ―に腰を下ろした。青年は正面の回転ドアを気にする素振りそぶりをしながら、横目遣いこめづかに、私のようすをこそこそ観察していた。気づいた私が振り向くと、彼はあわてて目を逸らし、決まりが悪そうに顔を伏せた。

ふと、私は不安になった。考えてみれば、手紙の差出人について私は何ら情報を持っていない。向こうはこの私が錦織摩耶であることに、果たして気づいてくれるだろうか。ここにはほかに若い女性がたくさんいるのに……。

私の心配は全くの杞憂きゆうに終わった。程なく、黒スーツを纏まとった品のよさそうな紳士が姿を現すと、真っ直ぐに私に向かって歩いてきた。

「錦織摩耶様ですね。大変お待たせいたしました。私はあざみ館執事おのがわらの大河原と申します。よろしくお願いいたします。」

白い口ひげをたくわえた白髪の紳士は丁重ていちょうに会釈えしゃくした。

「ああ、大河原さんですね。はじめまして。錦織摩耶です。」

あわててソファ―から立ち上がると、私もぺこりと頭を下げた。

背丈は私よりも若干低い……。

「それでは、お荷物をお持ちいたします。」

「あ、ちよつと待つて。大河原さん、どうして私が摩耶だつてすぐにわかったの？」私は率直に疑問をぶつけてみた。

「そりゃあ、わかりますよ。これだけの美人はそうはいませんからね……」大河原氏は素っ気なく答えた。

きょんとする私を尻目に、彼はそそくさと荷物を運び出した。

1・手紙（後書き）

ぶっちゃけコメント

短編小説の勝負どころは、出だしの一文とラストの一文ではないかな、と思います。出だしの一文は、読者の興味をひいて、なおかつインパクトのあるものにしたいのですが、それってかなり難題ですよね。

この小説でも、もう十回は出だしの文章を書き直していますが、未だに満足できるものにはなりません。あんまり懲りすぎた単語を使うとくどくなるので、とにかく月並みな言葉を並べてみました。苦戦中です。

第一章で私が表現したいテーマは、手紙の異様さです。平易な内容だけど、なにかおかしい手紙。不気味な雰囲気表現できたら嬉しいんですが、これまた難しくて、自分の限界を感じてしまいます。

i r i s G a b e

2・あざみ館

目的地の群馬県多野郡上野村は、群馬、長野、埼玉の三県にまたがる寒村だ。群馬県の形を羽を広げた鶴にたとえると、そこは右翼の尖端に当たる。鉄道が通っていないので、自家用車かバスに頼らなければ、入ることすらままならない秘境である。

高崎駅から上野村までの道中は、決して楽なものとはいえない。私を乗せた黒の高級車は、高崎市内を離れて、徐々に閑散とした山間に潜りこんでいった。

「案内の封筒に模られていたあの花は、アザミですよ。」後部座席からのり出して、私は訊ねた。

「ああ、気づかれましたか。そのとおりですよ。財閥の象徴でもあるアザミです」大河原氏は得意げに続けた。「今頃の暑い時期に花をつける、美しいけどくましい植物ですね」

「確か、鋭い棘がありましたよね？」

「はい、昔から美しい花には棘があるとよくいわれます。——ところで摩耶様は、ご存知ですか？ アザミという純粋種は、実は存在しないんですよ」

「えっ、じゃあ、私が知ってるアザミって……？」

「アザミと呼ばれる植物は、アザミ属の植物全般の総称だそうです」大河原氏はさらにつけ足した。「——つまり、アザミと一言でいっても、実はとてもたくさんの種類があるんです。似てるようで全く違う種も、さらにあるそうですね」

「あざみ館というくらいだから、きっと庭にはアザミがいっぱい咲いているんでしょうね？」とつさに、私はくだらない質問をしていた。

「ああ、森に行けば野草が幾らでもありますよ」

「近くに森があるんですか。素敵ですね」私が感心すると、

「いえ、あざみ館の敷地にある森です。五月女財閥は広大な土地を

所有しておりまして……」と大河原氏はいった。

敷地の中に森がある？ あつ氣に取られた私の姿をミラー越しに眺めて、大河原氏は笑っていた。

そうこうするうちに、道幅は対向車とすれ違うのもままならぬほどに狭まってきた。神流川^{かんな}沿いのくねった崖つぶち街道は、どこまでも延々と続いている。大河原氏というと、慣れたもので一向にスピードを緩めようとはしない。正に拷問^{ごうもん}だ。後部座席とはいえ、私は生きた心地がしなかった。

民家が途絶えてから、小一時間が経過しただろうか……。

「摩耶様、この峠を越えれば上野村です」大河原氏がいった。

「大河原さん。ちよつと降ろしてもらえない？」悲鳴をあげるように私は訴えた。

「どうぞ、ここは見晴らしがいい場所ですからね」

どうやら大河原氏には、私の発言の真意が伝わっていないようだ。

車は神流町と上野村の境界の峠で停まった。夕刻は近いものの、依然として外は蒸し暑い。しかし、車内の冷房に震えていた私には、むしろそれは心地のよいものだった。水を得た魚のように私は外へとび出すと、両腕を頭上に掲げて思いっきり伸び上がった。

突然、生温い風がさつと吹きこんで、後ろ髪を掻き乱した。思わず、小声を発して、私は両手で髪を押さえていた。

「血は争えませんか。今の摩耶様のしぐさは、亡きお母上にそっくりですよ」大河原氏が感心していた。

「あら、そうなんですか」少し恥ずかしい気持ちがあった。

ヒグラシの甲高い鳴き声が木霊している。まだ明るい夕日越しに、深い山間に猫の額ほどの盆地が見える。そこにはつづまやかな集落がポツポツと点在していた。

周囲から隔絶された村……。

「摩耶様。そろそろ参りましょうか」背後で大河原氏の声がした。やがて、私たちの車は村の中心地にやって来た。そこには、駐在

所や小学校、質素な郵便局、それにちよつとした商店の軒並が連なっていた。それらをやり過ぎて集落の外れにやつて来ると、私ははつと息を呑んだ。

かつて見たことがないほど立派な鉄門がそこにはあった。門の両サイドには、不気味な小悪魔ガゴイルの彫像が向かい合っている。蔦つたが生い茂った古壁が、あたかも万里の長城の如く、果てしなく伸びている。それは、単に侵入者を拒むだけではなく、内部を隠蔽いんぺいする目的で造られたかのようだ……。

大河原氏は車から降りて門の錠を下ろし、財閥の敷地の中に車を乗りいれた。再び車から降りると、キョロキョロと用心深くあたりを見まわして、錠をかけ直した。

ガシャンという乾いた音が響いた。その瞬間、なぜか私は、外界から永遠に隔離されたような気がして心細くなった……。

蒼蒼としたブナの森が眼前に広がっていた。その木立の隙間を掻かい潜くってアスファルトの小道が敷かれている。まるで、どこからひょっこりと白雪姫の小人がとび出して来そうな光景だった。

車は数分間走行して、ようやく大きな屋敷の玄関口に辿り着いた。「あざみ館の敷地はだだっ広いですからね。下手にうろつくと迷子になりますよ」

「これが、あざみ館ですか……」思わず私は見入った。

「そうです、大きな建物があざみ館——。その隣の小さな建物は別館で、私たち使用人の宿舎になっております」

あざみ館は西洋の教会を思わせる優美な建造物だ。印象的な尖塔が館の中心から聳そびえたっている。周りは芝生の庭園になっていて、色とりどりの花々が咲き誇っている。その美しさは、私の想像を遙かに凌駕りょうがしたものであった。

アーチ状の玄関の壁面には、封筒に模られていたあの図柄が彫りこまれていた。

アザミの紋章だ！

アザミ……。美しさと棘を合わせ持つ可憐な花。似かよった異種

がたくさんのとても奇妙な植物。そんなアザミを紋章とする五月女財閥。そして、私の真実の母、五月女摩由姫……。

館内に入ると、そこはちよつとした広間^{ホール}になっていた。やわらかなクリスタルライトに照らされて、クリーム色の壁面とチヨコレート色の天井とのコントラストがひとときわ映^はえていた。天井を支える幾本もの太い柱には、蔓が巻きつくような緻密な彫刻が施されており、床全面には、珊瑚色の絨毯が敷き詰められていた。

玄関から向かって、正面にはゴシック調の階段があり、左手にはオーク材の頑丈な扉が見えた。右手は長い廊下になっていて、その両側にはそれぞれ三つずつ、合計六つの白い小さな扉が取りついていた。

吹きぬけ構造ではないのに、一階の天井は異様な高さだった。二階へ向かう階段は、緩やかにらせん形を描き、上部は全く見えなかった。階段を下りたところには、童謡で詠われているような、大きなのっぽの古い置き時計があった。チツク、タツク、……と時を刻む音が、静かな館内をゆつたりと流れていった。

とその時だ。二階から赤いワンピース姿の若い女性が、ゆっくりと階段を下りてきた。背筋がピンと伸びたシルエツトからは、しなやかで優艶な体つきが見てとれた。

「あら、やつと着いたみたいね。摩耶さん。はじめまして」

この時の私の驚きは、とても言葉で表現できるものではなかった。その女性は、容姿・体型はもちろん、声色まで私とそっくりそのままだったのだ！

鏡で見る自分とは左右が逆になっている。まるで写真に写った私を眺めているような感覚だった。

「あなたは……？」

挨拶を返すことも忘れて、私は訊ねていた。

「あはっ。さぞかし驚かれたでしょうね」その女性は、細長い手を小ぶりの口元にかざした。さり気ないけど淑やかなしぐさであった。
「私の名前は摩帆^{まほ}——。あなたと私は実の姉妹なのよ」
「ひよっとして、一卵性双生児……？」

「うん、正確にいうと三つ子だね。もう一人、妹がいるわ」摩帆と名のる女性は、チラッと横に目をやると、「摩奈^{まな}——。いいかげんに隠れてないで、出て来なさい！」と叫んだ。

オーク材の扉の錠前がガチャリと音をたてた。ゆっくりと大きな扉が開かれる。中から車椅子に乗った女性が現れた。もう、驚かなかったが、彼女も私と瓜二つ。不気味なくらいに酷似している。

「お姉さん、隠れていたなんて、人聞きの悪い言い方しないで頂戴……」車椅子の女性はそろそろと私に近づいてきた。雪のように真っ白いドレスを着た、ガラスのように無表情で小さな顔が、上目遣いに私を覗きこんでいる。「はじめまして、摩耶姉さん——、妹の摩奈です」

彼女は、白く透きとおった右手を差し出した。

「はじめまして、摩奈さん」摩奈の手は少し冷たくて柔らかかった。
「あ、それから、摩帆さんも……。ごめんなさい、すっかり取り乱しちゃって……」私は弁解した。

「そうよね、実際に私たちは、お互いに似過ぎているもの。無理もないわ」フォローをするように摩帆はいった。

生活環境の違いだろうか、私だけが日に焼けて若干肌の色が濃いのと、髪がやや長かった。摩帆と摩奈の二人は、色白の素肌から肩口まで伸ばした髪型まで、何もかもが全くコピーのように同じだった。もっとも、摩奈は車椅子だから、一応、私たち三人は、他人から見分けがつくということになる。

「さあ、摩耶様——。お部屋に参りましょう」

大河原氏は荷物を手にして、さっさと歩いていく。私も一階の廊下に足を運んだ。廊下の両側にある六つの白い扉の前を通りぬけると、正面の突きあたりにエレベーターが現れた。

「お家の中にエレベータがあるんですね」私が感心すると、
「ええ、二階までしか、繋つながっていませんが……」大河原氏が答え
た。

「この建物は、何階までありますか？」

「部屋は三階までです。その上は塔になっております。階段でも上
れますが、危険なので気をつけてくださいね。十年前には、悲しい
事故も起こっていますから……」

大河原氏は、何やら不気味な台詞せりふをこぼした。

エレベータで二階に上る。エレベータから出ると（——つまり、
描写は一階とは逆向きになって）右手には一っだけ白い扉が、左手
には三つの白い扉があった。右手の大部屋は食堂である。左手の一
番手前の部屋は調理室だ。調理室にも食材を運ぶために、小型エレ
ベータが設置されているらしい。

「ここが摩耶様のお部屋になります」大河原氏がいった。

私に割りあてられた部屋は、調理室の隣にある二番目の白い扉の
部屋だった。

その時、大河原氏の胸ポケットから小さな振動音が響いた。

「おやおや？ 摩奈様がお呼びのようだ。申し訳ありませんが、す
ぐ戻って参りますので、お部屋でお待ちください」というと、大河
原氏は急いで階段を下りていった。

端はなから部屋で大人しく待っている気などない。私は二階を見てま
わることにした。

私の部屋の向こう隣の部屋はシャワー室になっていた。そのほか
の造りは、一階と全く同じだった。階段の前には広間があり、奥の
突きあたりには摩奈が出てきた部屋と同じ造りのオーク材でできた
頑丈な扉があった。その扉の前に立った私は、おそろおそろノブに
手をかけた。ゆっくりと力をこめると、意外にもノブはあっ気なく
まわった。二階のこの扉には、そもそもはじめから鍵は付いていな
かったのだ。中を覗きこんだが、大きな窓とランドピアノが置い

てあるだけで、特に何もない殺風景な部屋だった。

そろそろ、大河原氏が戻ってきそうだ。私は自室に足を向けた。

私の部屋の白い扉にも、もちろん鍵は付いていなかった――。

この部屋は、まるでペンションの宿泊部屋のような。そういえば、あざみ館そのものが、ペンションみたいな雰囲気がある。

いや……、違う！

ペンションよりも、もっともっと、ぴったりと当てはまるイメージがある。何だろう？

病院だ……！

この部屋を含むたくさんの小部屋は、正に病室そのものだ。そして、二階のオーク扉の大部屋は集中治療室……だった？

私はすぐさまこの考えを否定した。そんなはずはない。こんな片田舎にここまで大きな病院があるのも、いかにも不自然だ。

大河原氏が戻ってきて、「貴女方ご三姉妹ですが、摩帆様が長女、摩耶様が次女で、摩奈様が末の三女だと伺うかがっております。まあ、皆様、時を同じくして生まれてみえるので、順番の違いはさほど意味がないかもしれません……」と説明した。

「私が真ん中ですね。ところで、摩奈さんはいつから車椅子で生活されているの？」

「あれは、摩奈様が十歳の時でしたかね。交通事故で……、命に別状はなかったのですが、下半身は麻痺してしまわれたのです」

大河原氏は大きくため息を吐いた。

「それは、お気の毒に。一人では全く歩くことができないの？」

「はい。医者が一生歩けないだろうと申しておりました。階段も上れないので、摩奈様はエレベータを利用すれば二階までは行けますが、それより上階にはお一人では行くことができません」

「摩帆姉さんは、健康ですよ」

「そうですね。ただ、本当はお二人とも人見知りが激しくて、先程、

初対面の摩耶様とは自然に会話をしましたが、私にはそれがとても意外でした」

「摩帆姉さんは、そんな感じはしなかったけど。摩奈さんは、恥ずかしがっていたわね」

「摩帆様も、普段ならお客様が見えても、ご自分のお部屋に閉じこもってしまわれるのですが。まあ、摩耶様は実のご姉妹だから、それで抵抗がなかったのかもしれませんがね」

かく申す私も、どちらかといえば初対面の人は苦手である。

「それでは何かありましたら、そのボタンで呼び出してください」
大河原氏は部屋を出ていった。ベッドの横を見ると、緊急用の呼び出しブザーのボタンがあった。やはり、ここは病院だったのか……

……？

2・あざみ館（後書き）

ぶつちやけコメント

この小説を書くにあたって、日本地図をみながら舞台を探しました。そこで、浮かびあがったのが群馬県と長野県の県境でした。でも、書いているうちに、実際の上野村ってどういうところなんだろう？ だんだん、気になって気になって、結局、実際に行ってみるはめになってしまいました。

行くのは大変だったけど、とても素敵なところで、道路にはたくさんの花が植えられていました。そのときの苦労は、本文の描写に生きているんじゃないかと思います。百聞は一見にしかずですね。

i r i s G a b e

3・晩餐

夕食までまだ間があるので、屋敷の中を探索してみることにした。私の部屋を出ると、真正面には食堂がある。そこは、私の部屋を三つ合わせた広さを持つ大きな空間だった。入り口の扉は開けてあつて、中は筒ぬけだった。優に十人が座れそうな長テーブルが置いてあつた。

二階の広間^{ホール}のほうに私は足を運んだ。そこには、館を縦に突きぬけるあの階段があつた。一階に下りるか三階に上るかを悩んだ末に、私は三階に上ることを選択した。

三階への途中の踊り場には、白い等身大の彫像が置いてあつた。それは裸の若い女性の彫像だった。両肘を高く突き上げて後ろ髪を押さえながら、細身の綺麗な身体をくねらせている。豊かな両胸があらわにさらされていて、無表情な顔は斜め上方を見つめている。芸術的ともいえるが、どこかエロティシズムが感じられて、私は少し不快な印象を持った。来る途中の峠で大河原氏がいていた私のしぐさつて、もしかしたらこの彫像のイメージだったのかもしれない。

ふと思つた……。

車椅子の摩奈は、ここまでは来ることができないんだ……。

三階にも廊下があつたが、そこには白い扉の部屋が、左手（――二階の食堂の真上）に二つと、右手に一つの、合わせて三つしかなかった。下の階と比べるとやや廊下の奥行きは狭くなっていた。

私はさらに上へと目をやった。階段はまだ伸びている。おそらく、外から見えたあの美しい尖塔へ繋がっているのだろう……。

「摩帆さん。上に上つてはいけませんよ！」

突然、大声がしたので振り返ると、家政婦らしい中年の婦人がこちらを向いて立っていた。

「ごめんなさい。知らなくて……」とりあえず、頭を下げておいた。
「あつ、私は摩耶です。今日こちらに参りました」

今度は、その女性が驚いていた。「こつ、これは、失礼しました。
摩耶様でしたか……。家政婦の大河原です。どうぞ、よろしくお願
いいたします」

彼女は雑巾を手にしている。どうやら、廊下に並んでいる調度品
を拭いていたようだ。

「大河原さんとはご夫婦？」助け舟を出すつもりで、私は訊ねた。

「はい。もう十七年もの間、このお屋敷でお世話になっております
……」大河原夫人は少しだけ安心したようだ。

「あの……、この上はどうなっているんですか？」

「上には何もありません！ 絶対に上らないでください」そういい
切ると、大河原夫人は掃除に取りかかった。

絶対に上るなといわれると、却^{かえ}って上りたくなるものであるが、
とりあえず素直に部屋に引き下がった。

ベッドに横たわって、天井の幾何学模様を眺めながら、私は考え
ていた。

あざみ館……。人里離れたさびれた山奥に、こんなに豪勢な洋館
が建っているなんて……。

上ることが禁じられた、館のシンボルでもある尖塔……。かつて
そこでは事故があつたらしい。単に危険だから上ってはいけないと
いうことなのか？

十年前といえば……。摩奈が交通事故で下半身不随になったのも、
確か十歳の時……。つまり十年前だ！

そして、余りにも酷似する三人の姉妹……。たえ、一卵性の三
つ子であっても、声まで含めてここまでそっくりなのは、珍しいと
思う。容姿が似ていると、考えることまで同じになってしまうのだ
ろうか？ 摩帆や摩奈は何を考えて、この屋敷で暮らしているのだ
ろう……。。

さらには、実母の遺言……。いよいよ、明日の午後三時に遺言状が公開される。実の母、五月女摩由姫とは、どんな女性だったのだろうか？ 五月女財閥の顧問弁護士が直々に管理する遺言状を残した人物だ。果たして、財閥の権力を彼女は握っていたのだろうか？ まさか……。そこまではあり得ないか……。

そういえば、遺言の相続人って一体誰なんだろう？ 大河原夫妻は単なる使用人に過ぎない……。ということは、五月女摩由姫の遺族は、私たち三姉妹だけということになる！ この屋敷の規模から見積っても、遺産は相当な額かもしれない。だんだん、怖くなってきた……。

突然、ノックの音がした。

「摩耶様、午後七時でございます。晚餐のお時間ですよ……」大河原氏の声だ。私は考えに没頭した末にまどろんでいたようだ。

「すみません。すぐ行きます」あわててベッドからとび起きると、急いで足元の靴を履いた。

食堂のテーブルの上には白い布がかけてあり、ゆつたりと間を取って四本のキャンドルスタンドが置かれていた。オレンジ色のろうそくの炎に照らされて、彩り豊かな前菜が並んでいる。

テーブルの片側には、上座の椅子に摩帆が座り、下座は摩奈が車椅子のままでテーブルに着いていた。このテーブルは車椅子が丁度潜りこめる高さになっていて、近づいてロクさえ下ろせば、摩奈でも自由に食事を取ることができた。

反対側の下座に、——つまり摩奈の向かい側に、私は腰かけた。私の上座の席には、紳士が座っていた。還暦は過ぎているように思えるその紳士は、五月女財閥の顧問弁護士の松川新太郎氏であった。おそらく、明日の遺言公開のために、ここにいるのだろう。

食堂には穏やかなクラシックが流れていた。それは母の須美代

が好んでよく聴いていた曲だった。懐かしさに私は耽^{ふけ}っていた。

「いいですね。実に素敵な子守唄だ……」突然、松川氏が呺^{こぶや}いた。

「やだ、松川さん。サティのジムノペディよ！」摩帆が訂正した。摩奈は隣で必死になって笑いをこらえている。当の松川氏はいえは、その空気をあまり気にしていないみたいだ。

「母がこの曲をとても好んでました。あつ、育ての母のことです……」我慢できずに、私が口を挟んだ。

「摩耶さんは学生さんですか。それとも、働いてみえますか？」松川氏は、私のほうを振り向いた。

「大学はこの春に中退してます。育ての母が死んで、学費に行き詰まったからです」

「そうですね……。それは、お気の毒でしたね。でも、ここの遺産を相続すれば。また大学に戻れますよ」松川氏は慰^{なぐさ}めてくれた。

大河原氏が透きとおったスープを順番に給士している。美味しそうな匂いに惹^ひかれて、一口すすってみた。その味つけは極めて薄いものであった。はじめこそ、とまどったものの、次第に繊細で複雑な味覚が絡^{から}みあつて、融合していくのが、感じられてきた。無心に手を動かして気がつくと、スープ皿の底が見えていた。

「あなたのお母さんは、帝都大学の博士でした。とても、美しく、聡明なお方でしたよ」松川氏の声がした。

「あら、そうですね。母に関しては何も知らないの」私ははつとして答えた。

帝都大学といえば日本随一の名門大学だ。そこで博士の称号を取得したということは、母はとんでもない秀才であったことになる。

「このお屋敷には、ほかに誰が住んでいるのでしょうか？」

私が訊ねると、すかさず摩奈が返答した。

「私たち三姉妹とそちらの松川さん。それから、大河原夫妻と料理^{シエ}人の守屋さん、庭師の佐久間おじいさんの八人かな。今、ここにいるのは……」

どうやら、白馬に乗った王子様はこの屋敷にはいないようだ……。

「ほかの皆さんは、夕食はどうされるの？」誰に向けるでもなく、私が訊ねると、

「使用人は私たちの後で食事を取るから、心配なくていいのよ」と摩帆が答えた。

「ところでお姉さん、お気に入りのブローチが見あたらないけど。ご存知ない？」急に、摩奈が話題を変えた。

「ああ、あれね……。ちよつと借りただけよ。欲しければ、私の部屋から持っていけば……」摩帆はけろつとしていった。

「意地悪ね。私が三階まで行けないのは知っているでしょ！」摩奈がむつとした。「ねえ、摩耶姉さん。いつも、お姉さんたらこつなのよ……」

突然私にふられても、困ってしまう……。

晚餐の料理は、それは申し分のないものだった。手を尽くした小皿が次々と並べられた。それらは決して華やかではなく、私たちが満足する適度な分量になるように、気配りされていた。何よりも驚いたのは、品のよい柔らかな味つけであった。

「料理人の守屋さんは、大学院を出てから、本場のフランスで修行したカリスマ栄養士でもあるのよ」後で、摩帆が教えてくれた。

3・ 晩餐（後書き）

ぶつちやけコメント

尊敬する小説家スタンリー・エリンの小説「特別料理」で、主人公のコスティンがスープを飲むシーンがありますが、そのインパクトがすごくて、まねて書いてしまいました。

この章で表現したいのは、摩帆、摩耶、摩奈の三姉妹の人物像です。摩奈が車椅子で生活をするというアイディアは、この小説を書きはじめたときにはなくて、書き進むうちに思いついたものでしたが、私がこの小説で用いたアイディアの中では一番気に入ってます。

i r i s G a b e

4・実母

時計の時刻は、もう九時をまわっていた。シャワーを浴びた私は、脱衣場の鏡の前で髪をとかしていた。ふと下を見ると、小物入れに緑色の蝶々のブローチが置かれている。どうやら先程話題となったブローチのようだ。早速、摩奈に届けてあげなくちゃと、私は急ぎ足で階段に向かった。

一階と二階の階段の途中には踊り場がある。壁には大きな女性の肖像画が掛かっていた。何気なくそれを見た瞬間に、私は全身が凍りついた。

私の肖像画……？

肖像画に描かれているのは、まさしく私自身であつた！

いや……。そっくりだけど、よく見れば私とは違う。もちろん、摩帆や摩奈でもなかった。私たち三姉妹よりも、少しだけ雰囲気^{ふじ}が落ち着いている。

淡い藤色のドレスに身を包み、物憂げ^{もののう}にこちらを見つめながら、掌^{てのひら}を組んで椅子に腰かけている。もしかすると……、

「お母さん……！」私は悲鳴のような声を出した。

「そのとおり、母の摩由姫よ……」いつの間にか、後ろには摩帆が立っていた。

「摩帆姉さん……。この人が私たちのお母さんですか？」

「そうね、気味が悪いくらいに瓜二つでしょ。幼い時はそんなに気にならなかったけど、成長するにつれて母に似てくる自分が、だんだん怖くなつたわ……」

「お母さんは、いつ亡くなつたの？」

一瞬の間をおいてから、摩帆は小声で呟いた。

「十年前に、塔から転落したわ……。そのブローチ、摩奈に返してやってね」彼女はくるりと背を向けると、階段を上っていった。

一階の鍵付きのオーク扉の部屋は、本来は書斎であつたらしいが、今は摩奈の個室になっている。ノックをすると、ガチャリと錠前の音がして、車椅子の摩奈がぬつと顔を出した。

「摩奈さん。これ、シャワー室に置いてあつたわ」私がブローチを差し出すと、

「ああ、あれね……。ありがとう」意外と淡白な返事だった。「摩耶姉さん、紅茶を飲んでいきませんか？」突然、摩奈が誘ってきた。「ああ、それじゃあ、ちよつとね……」私は部屋に入れてもらった。摩奈は棚からティーカップを二つ取り出した。鼻歌を口ずさみながら、彼女は机の上の電気ポットからお湯を注いで、紅茶を準備している。

「何でも、一人でできるのね」私が感心すると、

「私ね——、摩耶姉さんが来てくれて、とても嬉しいのよ。私とお姉さんはあのとおり、そんなに仲がいいわけじゃないしね」摩奈はすっかり上機嫌だった。「ずっと、私たちは双子だと思つていたら、摩耶姉さんのことを聞いた時には、本当に驚いちゃった」

「いつ、それがわかつたの？」私は摩奈に訊ねた。

「えつとね、いつだったかな？　そうだ、あれは先月のこと、お姉さんがあざみ館に帰省してすぐだったわ。大河原のおじいさんがいったの——、あなたたちは、実は三つ子なんですよ、って……」あとけない顔で、摩奈は答えた。

どうやら、私だけでなく、摩奈や摩帆も、自分たちが三姉妹であるという事実を、最近まで知らなかったらしい……。

もう一つ、気になることを、私は摩奈に訊いてみた。「母が転落死したって、摩帆姉さんから聞いたんだけど……？」

「お母様ね。転落したのは私の交通事故の後だから……。とにかく塔の天辺から落ちたのは事実よ。このとおり、私は塔までは上れな

いから、詳しい状況はよくわからないんだけど……」摩奈は小首を傾げた。「ああつ、そうだ。摩耶姉さんは塔には行って見たの?」
「いいえ、家政婦の大河原さんに止められちゃったから」私は愚痴をこぼした。

「そうなの……、でしょうね……。でも、一度行ってみるといいわよ。私もこうなる前にはよく上ったけど、町の向こうまで見えるのよ」

町というのは、おそらく門外のあの集落のことであろう……。

「その階段を上っていけばいいのよね」私が確認すると、

「そうよ。三階の上に屋根裏があつて、さらに、もう一つ上れば塔に出るわ」

「途中に、屋根裏があるんだ……」

「そうそう。そこには開かずの扉があつてね。いつも鍵がかかつていて、中には入れないの。今はどうなっているのかなあ?」

「開かずの扉?」

「うん、時々、人が呻く^{うめ}ような音が中からしてきてね。ちっちゃい頃の記憶だからはっきりしないんだけど……」

素っ気ない顔で、不気味なことをぺらぺらと、摩奈は語りだした。
「私たちのお父さんってどんな方だったの?」私は話題を変えてみた。

「さあ……、知らないわ。お姉さんも、そんなの一度もお母様に尋ねなかったかもね」

「いろいろ、教えてくれてありがとう」私は礼をいった。摩奈はにっこりと微笑むと、小さく右手をふった。私は二階の自室に戻った。

とにかく、不思議と驚きの一日だった……。

自分とそっくりの母の肖像画。十年前に母が転落した塔。そして、摩奈がいていた開かずの扉……。

「これじゃあ、ちよつとしたホラー小説よね!」私は独り言を呟いた。

その夜は疲れからか、私はぐっすりと眠りこんでしまった。

4・実母（後書き）

ぶっちゃけコメント

摩由姫の肖像画も、書き進めるうちに浮かんだアイデアです。薄暗い大階段の途中に、こちらを見つめている肖像画が掛かっていると、かなり不気味ですね。

次章では謎の尖塔に摩耶が上ります。ご期待ください。

i r i s G a b e

5・塔

翌朝になった。朝食の時刻より少しだけ早く目が覚めた私は、顔を洗いに部屋を後にした。向かいの食堂の扉は、今日も相変わらず開いていて、中のようにすが丸見えだ。テーブルの上には料理皿がいくらか並べられていたが、まだ準備の途中らしく、誰もいなかった。それにしても、食事の準備や館内の清掃などの大仕事で、大河原夫妻と料理人のたったの三人だけで賄^{まかな}われているのだ。何もしていない私は、肩身が狭い思いがした。

ちょうど七時に朝食となった。私たち四人は、銘々^{めい}が昨晚と同じ場所に着席した。どうやら暗黙の了解で、テーブル座席は確定してしまつたようだ……。

食事を済ませてから、私の決意はいよいよ確固たるものとなつた。今日こそは、あの塔に上つてみよう！

大河原夫人は二階の掃除をしている。それを確認した私は、こっそりと階段へ足を運んだ。

三階から屋根裏までの階段は、すごく長く感じた。もう何年も掃除がなされていないようで、足元や手すりには薄っすらと埃^{ほこり}が積もつていた。つま先立ちでそろそろと階段を踏みしめて、ようやく私は屋根裏に辿り着いた。

屋根裏と思われるこの場所は、何もない空虚な空間であつた。剥^むき出しの床面と採光のための小さな天窓があるだけで、白い殺風景な塗り壁が淋しく四方を覆っていた。天井は私が背伸びをしても届かないくらいには高くなっているが、明らかに下の階とはようすが異なり、とても居住用の場所とはいえなかった。無論、摩奈がいつていた『開かずの扉』らしきものは、どこにもなかった。

階段はここで途切れていた。しかし、大きな木製の梯子^{はし}がさらに上へと伸びている。この先が頂上の尖塔だ……。躊躇^{ためど}うことなく、

私は梯子を掴んだ。梯子は全部で五つあった。それぞれの梯子と梯子の繋ぎ目には、辛うじて動けるほどの広さの簡素な踊り場があった。

ついに私はてっぺんに辿り着いた！そこは四畳半ほどの狭いスペースで、腰の高さほどの低いフェンスが周囲を取り囲んでいた。頭上高くには銀色に輝く鐘が釣り下がっていた。

高いところは苦手ではないので、私は平然とフェンスまでのり出した。摩奈のいつていたとおり、ここからは集落全体の素晴らしい景観が眺望できた。門から屋敷までの長かったあの小道も、上から眺めるとその形状がよくわかった。大河原氏がいつていた敷地内の森も一望できた。森にはところどころに樹木の切れ間があった。少し入った樹木の切れ間には、黒い屋根の一軒の建物が見えた……。微風が心地よく頬を撫でていく。時を忘れて私は座りこんだ。ふと下を眺めて、あらためて母が転落した事故の惨さを実感した。もしここから足を滑らせば、間違いなく生命はない！眼下には固くて冷たいコンクリートの地面があった。

塔から下りると、摩帆がいたので、早速、訊いてみた。

「摩帆姉さん、森にある黒い屋根の建物は、何なの？」

「あら、あんなところまで行ってきたの？」摩帆は少し驚いた顔つきをした。「あれはね……、火葬場よ」

「火葬場？」

「うふふ、この敷地内で人が亡くなっても、外部の人間には知られずに、遺体が処理できるのよ。便利でしょ……」

半分冗談なのか、気味の悪い笑みを摩帆は浮かべた。

「あ、そうだ。摩耶さん。もしよかったら、今から私の部屋に来ない？」いきなり、摩帆が誘ってきた。

「ええ、喜んで」私は二つ返事で申し入れを承諾した。

三階の廊下には、小部屋が二つと大部屋が一つある。

「ここが、私の部屋よ」摩帆は階段の一番近くにある白い扉に手をかけた。この扉にも鍵は付いていなかった。

そこは、ベッドにテーブル、本棚にクローゼットという、シンプルな部屋だった。本棚には、流行はやりの小説や、理工学の専門書が並んでいた。

「とても、難しそうな本がたくさんありますね」私は思ったことをそのまま口に出した。

「ああ、ここにしていると何もできなくなるからね。勉強道具を持ってきたのよ」

「摩帆姉さんは大学生ですか？」

「そうよ、今月の末には大学院入試の一次試験があるから、本当はこんな田舎で遺産問題にかかわっていたくないんだけどね……」

「大学院入試って、摩帆姉さんはまだ二十歳はたちじゃないですか？」

「私、学年を二つとび越しているから……」

母が帝都大学の博士なら、長女は弱冠二十歳で大学院に進学しようとする秀才だ。それに引きかえ……、私は自分が情けなくなってきた。

「摩奈さんはずっとここに住んでいるの？」私は話題を変えてみた。

「そうね、摩奈は生まれてから今までずっとここにいるわね。十七の時に、私が大学に合格して上京するまでは、私たちは一緒にここで暮らしていたわ」

実の三つ子なのに、母の摩由姫は、私一人だけをなぜか他人の家族に預けた……。何か、やむを得ない事情でもあったのだろうか？

私は一抹の淋しさを感じた。

「三階の、ほかの部屋はどうなっているの？」私が訊ねると、

「隣の小部屋は空き部屋ね。掃除を全くしていないから、寝る場所もないけどね……」

「向かいの広い部屋は、何の部屋ですか？」

「じゃあ、ついていらっしやい……」

摩帆は部屋を出ると、まず隣の白い扉のノブを捻ひねった。いわれた

とおり、中は埃だらけで何の調度品も置いてなかった。次に、私たちは向かいの広い部屋の前にやって来た。扉を開けると、そこは背の高い本棚が、ところ狭しと立ち並んだ蔵書室だった。

「この本は母の所持品なの。私が小さい頃からここにあったのよ。鍵はないから、読みたい本があれば、何時いつでも自由に持つていいわよ。もっとも、ほとんどが専門書なんだけどね……」摩帆が説明した。

「こんなにたくさんの本があるのに、ちょっと不用心ですね」私が訊ねると、

「そうね。今じゃ、あざみ館で鍵がかけられる部屋は、摩奈の部屋だけだわ……。まあ、よそ者が自由に往来いきまできるところでもないしね。ここは——」摩帆がいった。私は軽く覗うかがいて、蔵書室を後にした。

5・塔（後書き）

ぶつちやけコメント

小説の舞台のあざみ館の描写は楽しいけれど、細かく場所を記述しようとするとき、雰囲気は怖くなくなっていたり、逆に怖くしようとしていて気づいてみたら描写が矛盾していた、なんてことの繰り返しです。何度も読み返して、書き直していると全然仕事が進行しません……。

次章は、いよいよ核心の遺言状の公開が行われます。

i r i s G a b e

6・遺言

八月七日の午後三時——。いよいよ、あざみ館の食堂にて、故五月女摩由姫が残した遺言状が公開される。遺言の執行者である松川信太郎氏が、テーブル正面の上座に厳かに着席した。松川氏の左側には、手前から、摩帆、大河原氏、大河原夫人が、そして右側には、私、摩奈、料理人の守屋雅之氏、庭師の佐久間竹蔵じいさんが座っていた。七名の覚束ない視線が、松川信太郎氏一人に注がれていた。その時、私は考えていた……。母は十年も昔に亡くなっている。なぜ、遺言は死の直後に公開されなかったのだろうか？ もちろん、母がそのように取り計らったことが理由であるのだが、だとしたら、その目的は？ そして、遺言の内容は……？

松川氏の低い声が響いた。「ご静粛にお願い申しあげます。遺言状の公開の前に、故人が生前に、遺言状の完成と同時に私に委託されたお手紙を、ここで代読させていただきます」

松川氏は懐から一枚の封書を取り出して、読み上げた。

『松川信太郎様——』

私がこの世からいなくなる事態が生じれば、あなたの指揮の下で、以下の手続きを実行してください。とても重要なことですから、くれぐれも手違いのないようお願いします。

一つ、私の遺言の執行を行うこと、

一つ、私の死亡届は出さず、館の外部には、私の死の一切を秘密とすること、

一つ、私の娘たちが二十歳になる年に、娘たちを一堂に集めて遺言状を公開すること。

娘たちのそれぞれの連絡先は、遺言状に添えてある書類に記載しております。（以下略）

母は自分の死を、世間には公表しないようにした。さらに、遺言状の公開を、私たちが二十歳になるまで控えた。何の目的で……？そして、私の連絡先を知っていた。つまり、私が外の世界で生活していることを、母は認知していたことになる……。

「それでは、故人の意思により十年の歳月を未公開にされていた遺言状を、ここに開封いたします」松川氏は私たちの目の前で、遺言状が入った包みにゆっくりと錠^{はさみ}を入れた。

「では、読みあげます……」

松川信太郎氏が代読した五月女摩由姫の遺言状の内容は、実に異様で驚愕に堪えないものであった……。

『 遺言書 ——

第一条—— 遺言者は以下の条件を満たす者全てに、第二条に記する使用人等に与える報酬を除いた五月女財閥の全財産を、均等に相続させることとする。

その条件とは、

一つ、 我が娘 摩帆、摩耶、摩衣、摩奈 のいずれかであること、

一つ、 二十歳に執行される遺言状の公開に出席していること、

一つ、 二十五歳の誕生日までに生存していること、——とする。

尚、遺産の相続は二十五歳の誕生日八月八日に行うこととする。

第二条—— 大河原義満、大河原志保、守屋雅之、佐久間竹蔵にはそれぞれに一千万円ずつを遺贈する。但し、本人が遺言公開時に死亡している場合には、相続の権利を失うものとする。尚、この四名については、遺産相続後もひき続き当財閥のためにご尽力いただくことを強く要望する。

第三条—— 第一条の条件を満たす者で、長女摩帆、次女摩耶、三女摩衣、四女摩奈の優先順で最上位にいる者には、五月女財閥の

全指揮権を与える。そして、現在進行中のプロジェクトの責任者として、その継続を行う義務を課す。

第四条—— 万一、第一条を満たす生存者がたった一人になった場合には、たとえ二十五歳の誕生日を迎えなくても、その時点で生存者に遺産の相続を行うこととする。

日付 —— 年六月六日

住所 群馬県多野郡上野村——

遺言者 五月女摩由姫—— ㊦

遺言状が読み終えられた時、誰もが凍りついて何もしゃべることができなかった——。

やがて、摩帆がヒステリックに笑い出した。

「あはは——、いかにも母らしいわね。ねえ、遺言の作成の日付を聞いた？ 摩由姫は私たちが生まれてから間もなく、この遺言を作っているのよ！ どういうつもりなのかしら……。あの女は何かのシナリオを想定して、私たちを操あやつっているんだわ！」

「摩衣って誰？ でも、ここに出席していないのだから、その娘こに財産の相続権はないのよね……」 摩奈がポツリと呟いた。

「私たちは三つ子ではなくて、四つ子だった……。松川さん！ あなたのその手紙には、摩衣という娘むすめの住所も記載されているのよね！」 今度は私が大声を張りあげた。

「申し訳ありませんが、必要以上の事実を相続人に話すことは、固く禁じられております……」 冷静に松川氏は答えた。

「誰に？ 摩由姫に……、それは結構なことね！」 挑発的に摩帆が叫んだ。

「さようでございます——」 松川氏はあっさりとかわした。

「なるほどね……。松川さんは、摩由姫が遺言状で謳うたっているプロジェクトとやらについても、何かご存知なのね。やっと、納得できたわ……」 摩帆は皮肉っぽく松川氏にいい放った。

「二十五歳の誕生日まで生存していること……ですって。うふふ……

…。可笑しいわね。私たちが普通にしていれば、二十五歳まで生存するなんて、当たり前じゃない……」摩奈が軽率に口ずさんだ。

私はどきっとした。その考えはタブーのはずだ！

摩帆が得意げにいった。「あんた、真面目にいつているの。それとも、私たちを油断させるための演技なのかな？ 五月女財閥の権限を相続できるのは、この中でたったの一人なのよ！ ということは、優先順位が一番高い私が、一番危険だってことよね……」

「お姉さんったら、何をおっしゃっているの？」車椅子の摩奈は、無表情に摩帆を見つめている。「私はただ、三人がこうして一緒に揃ったのだから、仲良くしていかなきゃ、といっているのよ」柔らかな口調で摩奈がいい返した。その時、摩奈のかわいらしい口元が、ちよつとだけ緩んだのを私は見逃さなかった。

私は咄嗟に覺った。もはや、私たち三人が仲良くしていくことなんて、絶対にできっこない。自分と全くそっくりの他人がこの世に存在するなんてことが、そもそも許せないし、ましてや、莫大な遺産の相続権も絡んでしまったのだから……。この思いは、今、間違はなく、摩帆も摩奈も感じ取っているはずだった。

ところで、この場に立ち会わなかった摩衣という女性は何？

私たちの姉妹……？ 今、彼女はどこにいるのだろうか？

遺言の公開は三十分ほどで終了して、私たちはそれぞれの自室に戻った。その時、私は自室に鍵がかからないことに、一抹の不安を覚えずにはいられなかった。

6・遺言（後書き）

ぶっちゃけコメント

「起承転結」でいったら、いよいよ「起」が終わって「承」に入るところでしょうか。この後、一気に「転」と「結」に進行いたします。「起」の記述で残したいいくつかの伏線を意識して、今後の展開を盛り上げていきたいと思っています。

ところで、遺言状の書き方が全然わからなくて、インターネットで検索しました。インターネットって本当に便利ですね。手紙も書かなくなったご時世ですので、手紙の書き方のHPも、私にとって大いに役に立ちました。そして、手紙文化の大切さをあらためて実感しました。だって、手紙や遺言状って独特の雰囲気を持つてますものね。

次章ではついに事件が起こります。摩耶たちの運命は……？

i r i s G a b e

7・毒

七時丁度に食堂に入ると、すでに摩帆と摩奈は席に座っていた。テーブルの上には、美味しそうな料理が並んでいて、いつでも晚餐がはじめられるようになっていた。

しばらくの間、私たち三人は誰も会話を切り出そうとはしなかった。間の悪い空気があたりを充満していた。ただクラシックのBGMだけが、静かに食堂を流れていた。

やがて、摩奈が口を開いた。

「はやく、松川さんは来ないのかな。食事ができないよね……」

摩奈の発言とほぼ時を同じくして、ようやく松川氏が食堂に姿を現した。

「申し訳ありません。少々遅れてしまいましたかな」松川氏は素直に謝った。

私たちは一斉に食事を開始した。やはり、遺言状公開のしこりからであろうか、銘々は無言で食事に専念していた。

突然、その静寂が破られた……！

「何？ この食前酒——、腐ってない？ とても、苦いわ！」

摩帆が甲高い声を張り上げた。どうやら、摩帆は小さなカップに注がれた食前酒を一気に飲み干したようだ。私の目の前にも、まだ手を触れていないカップがあった。桃色の透きとおった液体が満たされており、果実酒のようだった。

「へー、そうなの。じゃあ、私は飲むのを止めようかな……」嫌味を告げるように、摩奈がいった。私は摩帆が怒り出すんじゃないかと気づかって、思わず彼女に目をやった。

摩帆の顔は青ざめていた……。

突然、口がガクツと開いて、舌がとび出てきた。手は小刻みに震えている。やがて、瞳孔が丸く開いて、身体がビクツと大きく一回揺れたかと思うと、そのまま摩帆は椅子から転げ落ちた！

隣にいる車椅子の摩奈は、何もできなかった。反対側の席の松川氏と、傍で給仕をしていた大河原氏が、ほぼ同時に摩帆のところに駆け寄ったが、すでに彼女の生命は途切れていた。

「すみませんが、皆さん今のままで、動かないでください！」松川氏が叫んだ。「おそらく心筋梗塞でしょう。摩帆さんはお亡くなりになりました」

ヒステリックに私が叫んだ。「お願い——、この音楽を止めて！」偶然であろうか、その時、食堂に流れていた音楽は、ラヴェル作曲の『亡き王女のためのパヴァーヌ』であつた……。

「毒殺なのですか？」咄嗟^{とっさ}とはいえ、愚かな発言であつた。

松川氏は私をしげしげと見つめて、重々しく答えた。「毒殺かどうかの断言はできませんが、症状から判断すると、アルコール系の強い毒——、例えばトリカブト毒を、摩帆さんは摂取してしまつたようです」

「トリカブト……？」私が訊ねると、

「そんなの、この敷地内にいくらでも生えているわよ」平然と摩奈がいい放つた。

「ちよつと、失礼します……」松川氏は立ち上がつて、摩奈のテーブルに置かれた食前酒のカップを手にとつた。細心の注意を払つて、その匂いを確認する。液体にわずかに指を浸して、それを用心深く舌で舐めた。摩奈のテーブルのカップに対しても、同様の作業を行った。

「多分、間違いはないでしょう。あなた方三人の食前酒には、いずれも猛毒のトリカブトのエキ스가混入されているみたいです」松川氏は断言した。

「殺人事件ならば、すぐに警察に連絡しなきゃ……」震えながら私がいふと、松川氏は予想外の言葉を発した。

「それは、故母上のご意思に反するでしょう……。警察には連絡い

たしません。摩帆さんのご遺体は敷地内の火葬場で極秘に処理いたします——」私が耳を疑うと、松川氏はさらに続けた。「ここにいらっしゃる皆さんにお願いいたします。五月女摩帆という人物は、元々いなかったものとして、今後の事を進めていただきたい！」

「だって、摩帆姉さんは現役の大学生なんですよ。大学へは、一体何て説明するのですか？」私が問いかけると、

「じゃあ、行方不明か何かにしておけばいいんじゃないの？」落ち着いた声で、摩帆が答えた。

私はぞつとした。この空間に……。

この人々は異常だ！

母と姉……、大の大人が二人死んでも、最初からその人物が存在していなかったかの如く、内密に事を処分しようとしている。

もし私が、ここで死ぬような羽目になれば……？ 私には身内が一人もいない。私の存在を抹消するのは、何の造作もないことである！

私は摩奈を眺めた。一見、大人しそうで従順に見える摩奈、常時車椅子に頼り、一人では生活に支障をきたしている摩奈——、まさか、彼女が今回の毒殺の実行犯なのだろうか？

結局、私たち三姉妹の食前酒全てに、毒は盛られていた。

毒を盛ること——、それ自体は簡単にできることだ。なぜなら、ここの食堂は、テーブルに並べられた準備中の料理に、誰にも見られず、いとも容易く近づけることができるからだ。人手不足のために食堂が無人となるのは茶飯事であり、そして、そのことは周知の事実なのだ。

三人の全てに毒を盛ったのは、おそらくカムフラージュであろう。あらかじめ毒が入っていることを知っていれば、それを取らなければよいだけである。

だとすると、摩帆よりも早く食前酒に手をつけていれば、この私が死んでいたことになる……。

事件のごたごたから開放されたのは八時過ぎだった。私が食堂を出ると、車椅子の摩奈が追いかけてきた。私はビクリとした。

摩奈は全く悪びれるようすもなく話しかけてきた。

「どうやら、私たちは運がよかったみたいね、摩耶姉さん……。あら、そんな目で見ないで頂戴。やったのは私じゃありませんよ」

「あなたこそ、私を疑わないの？」私は摩奈に訊き返した。

「そんなの疑つてもしかたがないでしょ……。もつとも、私の気持ちは摩耶姉さんには筒ぬけなんでしょうけど。私たちは一卵性の三つ子だもんね。あつ、正確には四つ子だったっけ？」

「お互いにね……」挑戦状を叩きつけるかのように、私は返した。私の威嚇にも全く臆することなく、摩奈は淡々としていた。

「私だって、命は失いたくないわ。でも、私は摩帆姉さんのことは嫌いだったから、正直なところ、清々しているわ……。あつ、摩耶姉さんとは仲良くしたいと思っているのよ」

「それじゃあ、私たちはいつしよにいないほうがいいのでしょうね。私は明日にも、ここを発つわ。もし、私を殺したいんだったら、今晚しかチャンスはないからね！」

「まあ、摩耶姉さんったら、怖いことを……」摩奈は無邪気に笑っていた。「摩耶姉さん——、私が犯人だと決めつけられないほうがいいと思うけど……」摩奈のあどけない眼がきらりと光った。

「どういう意味？」

「だって、ここにはほかにも使用人がいるのよ。彼らは大丈夫なの？」

「彼らは私たちが死んでも、何も利益はないわ……」私が反論すると、

「そうかしら？ 私たちが二人とも死ねば、誰にも知られずに私たちを埋葬できるのよ……」さり気なく摩奈が答えた。

いわれてみれば、全くそのとおりである。摩帆の殺人の動機は、私たち姉妹だけでなく、ここにいる全員にあるのかもしれない……。

「まあ、摩耶姉さんが、明日ここ去るのは賢明だと思うわ。でも、

今晚のご自分の身はどう守るおつもり？ 私は、鍵のかけられる自室に閉じこもってしまえばいいけど、摩耶姉さんも一緒に私の部屋に泊まるのかな……？」摩奈は嬉しそうに笑った。

「——そうだ、いい事を思いついたわ！ 摩耶姉さんも、私も、今夜の身の安全が完全に保証できる方法が……」摩奈がいった。

「方法……？」

「まず、私が自分の部屋に入って、中から鍵をかけます。これで、私の身の安全は保証されるわね。次に、使用人と松川氏を全員、この建物から外に出します。彼らは離れの建物に泊まってもらえばいいものね。そして、摩耶姉さんがこの建物の玄関の鍵をかけてしまえば、彼らが私たちを襲うことはできなくなるわ。いい考えでしょ？」摩奈は得意げにいった。

「それでは、まだ不十分よ。この建物の中で、あなたが私を襲ってくるかもしれないじゃない？」私はいった。

待つてましたとばかりに、摩奈はいった。「そう来ると思ってい

たわ。でも、大丈夫よ。摩耶姉さんは玄関の鍵をかけた後で、三階の摩帆姉さんの部屋にいつて寝ればいいのよ。ご存知のとおり、私は一人では二階までしか行けないのだから……」

たしかにそのとおりだ……。これで、私たち姉妹双方の身の安全が、完全に保証されたことになる。

私は摩奈の意見に賛同した。使用人と松川氏にはその旨を話し、承諾を得ることができた。

時刻が午後十時を少しまわった時に、まず車椅子に乗った摩奈が自室に入り、ガチャリと中から鍵をかけた。次に、使用人と松川氏に建物の外に出てもらい、私がしっかりと玄関に鍵をかけた。私はもう一度、一階の全ての窓の鍵がきちんと閉まっているのを確認して、階段を上った。

階段の踊り場にある摩由姫の肖像画の前で、私は立ち止まった。いつものように、肖像画は慈しむようなまなざしで、静かに私を見下ろしている――。

やがて、私は肖像画へ語りかけた。「全ては、あなたの思惑^{おもわく}どおり
に、事が運んでいるわね……」

7・毒（後書き）

ぶっちゃけコメント

ようやく「毒」の章に来て、事件となりました。残る二つの章「階段」と「日記」で物語は一気に収束へと向かいます。

「あざみ館の三姉妹」は以前に私がHPで公開していた小説ですが、今回文章の大幅修正ということで、リニユアルさせていたただいております。文章の修正というだけで、もう丸二か月も費やしてしまいましたがおかげ様で、前よりも満足いく文章になってきました。何よりも、自分自身の文章表現の勉強になっております。

以前の小説を読まれた方はお気づきだと思いますが、今回のリニユアルでは、あざみ館の食堂にBGMを流しました。理由はおわりのように、摩帆が殺される場面でBGMに「亡き王女のパヴァーール」が流れていて、摩耶がヒステリックに叫ぶと、怖い雰囲気が生み出せるかな？と思いついたからです。そのために、伏線として「晚餐」の章で、松川氏にその時流れていたBGMを間違える発言をしてもらっ、という設定を加えました。

ところが、ここで松川氏にどのように間違えてもらうかで、また悩まされることになりました。最初は、流れているブラームスの曲を、松川氏が「モーツワルトはいいですね」と間違えてもらう予定でしたが、私自身がクラシックにうとくて、ブラームスとモーツワルトの区別に自信がありません。果たして、小説でこの間違いがうけるかな、と疑問に思いました。考えてみれば、ブラームスが流れていた翌日に、ラヴェルが流れるというのも、一貫性がないかなとも思うようになり、悩みはどんどん大きくなってしまいました。

ラヴェルと並べても自然な近代作曲家の曲で、誰でも聴いたことがあるような名曲つてないだろうか？　そうして、浮かんだのが、サティのジムノペディ第一番でした。しかし、ここでも新たな悩みが……。今度はジムノペディを、松川氏がどんな別の曲と間違える

のか？ まさか、ジムノペディを聴いて、「モーツワルトですか？」
ではおかしいので……。

まあ、こんな感じで、文章修正も苦しみながらも、楽しんでおります。

「あざみ館の三姉妹」は本格推理小説ではなく、スリラー・ミステリーを目指していますので、事件の解決の手掛かりが、全て提示されているわけではありませんが、この「毒」の章までで、いちおう「起承転結」の「転」が終わったところになります。

つまり、『読者への挑戦』をいれるとすれば、ここになります。

これまでの文章で散りばめられた伏線が、今後の解決編「階段」、「日記」の章で解き明かされていきます。

i r i s G a b e

8・階段

三階の部屋で寝泊りができる部屋といえば、摩帆の部屋だけだった。そこは鍵がかけられる部屋ではないのだが、摩奈は階段を上ることができないので、間違っても摩奈から襲われるという心配はなかった。しかしながら、今日亡くなったばかりの故人の部屋で寝泊りするというのは、もちろん気分のないものではない。

その夜、私はなかなか寝つけなかった。無理もないことだが、精神的には極限状態である。たとえ、理屈の上では身の安全が保障されているとはいえ、自分が殺されるかもしれないという状況の下で、悠然と眠りにつけるほど私の神経は図太くはない。

外は満月だった。灯りが消えた真つ暗な部屋の中で、窓から差しこむ月明かりを頼りに、置時計の表示を確認すると、時刻は午前一時四十三分になっていた。

虫の音と、流れる小川のせせらぎのほかには何も聴こえてはこない。それは、何もかもが凍^いてしまったかのように思える、漆黒の真夜中であつた。

突如、私は感じとつた――、遠くで何者かが発している微^{かす}かな気配を……。

きしっ……、きしっ……、……、きしっ……。
階段の軋^{きし}む音がわずかにする。誰かが、こちらに向かつてゆつくりと階段を上つて来る！ まさか……。

館内には、私のほかには摩奈しかいない。足が不自由な摩奈は、階段は上れない。使用人たちは追い出して、全ての窓には鍵をかけた。すなわち、今、階段を上つて来る人間がいるはずがないのだ！ 私の憶測をあざ笑うかのように、その足音は確実に近づいている。そして、この部屋の前までやって来て、足音はぴたりと止まった。

暗闇の部屋の中で、私は息を呑んで正面の扉を凝視していた。ほ

のかな月明かりに照らされた白い扉には、琥珀色をした真鍮しんちゆうのノブ
が取りついている。やがて、ノブが微かな気味の悪い摩擦音をたて
てまわり出した。

ぎっ……、きいいい——。

九十度ほど回転すると、ノブは静止した。静かに扉は開いていく。
その扉の向こうからは……、黒い人影が……！

私は素早く左手を伸ばすと、電灯のスイッチを押した。急に部屋
全体が明るく照らされて、今度は侵入者が面食らったようだった。
左手で電灯の光をさえぎり、右手に大きなサバイバルナイフを握り
しめている侵入者は——、摩奈……？ いや、摩奈はここには来ら
れない——。

ベッドの上で私は上体を起こすと、侵入者に向かって身構えた。
そして、彼女にはつきりと聞こえるようにいい放った。

「いらっしやい、摩帆姉さん——」

侵入者の透きとおった声が響いた。

「なんだ、わかっていたのなら、逆に不意打ちすればよかったのに
……。あなたも案外お人好しね」

「いろいろ、お話を伺いたかったのよ……」私は答えた。

「ここで死んでしまう人が、今さら何を訊きたいのかしら？」

「なぜ、摩奈を殺したの？」

「あの時は、あなたと摩奈のどちらが死んでもかまわなかったのよ
——」私を睨みつけて、摩帆はいった。「だから、三人の食前酒の
全てに毒を入れたわ。摩奈が死ねば、私が摩奈になりすまして、足
が不自由だと思わせて生活ができるから、次にあなたを殺す際に有
利になるし——、あなたが死ねば、生き残った車椅子の摩奈を殺す
のは造作もないことだし……。とにかく、私が食前酒を飲まなけれ
ばよいだけで、後はいくらでもごまかせたからね——。もう、おわ
かりと思うけど、今日の夕食の時は、摩奈と私は席を取り替えて座
っていたのよ。座ってしまえば、摩奈と私は見分けがつかなくなる

もの……」摩帆は一息いれた。「——摩奈になりすました私が、食事の途中で車椅子から立ち上がれば、みんなが驚くわよ——、という悪戯いたずらを持ちかけたら、摩奈は喜んでのってきたわ。あの娘、あの遺言の内容を知った後でも、警戒心が全然なくて、本当に子供なんだから……」摩帆の端麗な口元は冷たい笑みを浮かべていた。

彼女はさらに一步、足を踏み出して来た。「ところで、あなた——、どうして私が摩帆であることがわかったの？」

私は落ち着きはらって説明した。「些細ちさいなことだけど、摩奈は私のことを『摩耶姉さん』と呼び、あなたのことはいつでも『お姉さん』と呼んでいたわ。でも、夕食後の摩奈は、なぜかあなたのことを『摩帆姉さん』と呼んだのよ。最初は気づかなかったけど、後になつて、生き残ったのが摩奈ではないのかもしれない、と思い立つたわけね……」

「なるほどね。全く気づかなかったわ……」摩帆は感心していた。今度は確信をもつて、私は摩帆に尋ねた。「摩由姫を突き落とししたのは、あなたなのね！」

「そうよ、あれは十歳の時ね……。私は、自分が母に似ていくことが怖かった……。母の存在が、なぜかとても許せなくなってきたの。あなたにも、多分わかるでしょう？ この気持ち……。だから、母が塔に上る時に、いっしょについていって、後ろからちよつと押してやったのよ。母は別に警戒していなかったから、子供の私でも容易くできる仕事だったわ……」

摩帆がさらに一步前に出た。「さあ、そろそろ訊きたいことは済んだかな？」

「そうね、大体わかったわ……」

「そう——、じゃあ、あなたにはそろそろ死んでもらいたいんだけど……」

摩帆はナイフをかざして、嬉しそうに近づいて来る。私はベッドで上半身を起こして、身構えるだけだった。

「じゃあね、おやすみなさい……」目の前までやって来た摩帆が、

ナイフを振りかざした時だ――、私はふとんの中に隠し持った刃渡りの鋭い料理包丁を取り出すと、摩帆の左胸に目がけてぐさりと突き刺した！

「ぐっ……」雀のような一声を発したかと思うと、摩帆はあえなく床に崩れ落ちた。即死だった……。

「お姉さんこそ、お人好しね。私だって、これでも五月女摩由姫の娘なのよ。大人しくやられるわけがないじゃない……」

細身の身体からどくと流れ出る大量の血汐を見下ろしながら、私は捨て台詞を呟いた。

8 ・ 階段（後書き）

ぶっちゃんコメント

幼い時に上るのが怖かった夜の階段――。部屋の扉の向こうには、
誰かいるのかもしれない……。こんな思いが表現できたらいいなと
思いつつ、この章を書いてみました。

i r i s G a b e

9・日記

シャワーの微孔から、絶え間なく湯がふき出して来る。その向こうに、丸い照明の光がぼんやりと見える。

首筋に触れた湯が、鎖骨から胸の膨らみへとそそぎこみ、下腹部をつたって足先まで流れていく。きっと、摩帆の体内からとび散った返り血を、綺麗に洗い流してくれていることだろう……。

石鹸の香が漂う湯けむりに包まれながら、私は思った。

全てがおわった……。

摩帆も摩奈も摩衣もみんな死んだ——、姉妹の中で生き残ったのは、この私だけだ。もうこれで、私を脅かすものは、何も存在しない……。

翌朝、摩帆の遺体の処分は、使用人たちが協力して行ってくれた。使用人たちにしてみれば、私は殺人犯ではなくて、四姉妹の唯一の生存者である。そして、五月女財閥の正統な後継者なのだ。

作業を終えた大河原氏に、私は訊ねた。

「ところで、大河原——、摩由姫が死んだ時、彼女は何歳だったの？」

「享年三十九歳でした。お嬢様——」

やはり……。ということは逆算すれば、私たちを彼女が身籠ったのは年齢が二十代後半ということになる。つまり、それは彼女の研究がもつとも脂がのつていた時期でもあるのだ。そんな忙しい時に、子供を身籠りながら、博士の称号を取得するのは、不可能ではないが、何か不自然であるような気がする。冷淡で合理的な摩由姫らしからぬ行為である。

私は大河原氏にもう一つの質問をしてみた、返答される言葉の確

信を胸に抱きながら……。

「摩由姫の研究の専門分野は何なの？」

「医学でございます。お嬢様——」

私は大河原氏といつしよに屋根裏まで上っていった。

「さあ、この壁を壊して頂戴。あなたが、塗りこめたんでしょ」目の前にある漆喰の塗り壁を擦りながら、私は大河原氏に命じた。斧を受け取った大河原氏は、塗り壁を壊しはじめた。すると、壁の中からオーク材の頑丈な扉が現れた。

これが、開かずの扉……？

「鍵は開けられるの？」振り向いて、私が尋ねると、

「はい、しばらくお待ちください」と大河原氏は答えた。

大河原氏は一旦階下に下りると、また戻って来た。手には鍵の束を携えている。彼は、鍵をひとつ選んで扉の鍵穴に差しこんだ。ガチャリと音をたてて、開かずの扉が開放された。

部屋に入ると、大きなテーブルがあつて、様々な実験の小道具が載っていた。テーブルの向こうには本棚があり、脇には執筆用の机と椅子があつた。

奥には、さらにもう一つの扉があつた。その扉はこちら側から錠を下ろすことができる構造になっており、顔の高さのところに鉄格子が嵌めこまれた窓枠が取りついていて、それはまるで、誰かを幽閉する目的で造られた部屋であるかのようなだった。

鉄格子越しに内側を覗きこむと、そこは階下の小部屋と同じくらいの広さであつた。手が届かない高さに、採光のための天窓があるが、そのほかに窓はなかった。そして、ベッドがたった一つだけ——、それがこの部屋の唯一の家具だった。

「ここに、摩衣が閉じこめられていたのね……」

「はい、摩衣様は生まれた当時から脳に障害がありました。摩由姫様が密かにここに閉じこめて、お育てになられていたのでございます。このことは、私と家内を除いてはどなたもご存知ありません」
「摩由姫が不慮の事故で死んだ時に、摩衣が取り残されてしまったってわけね」

「はい、私と家内で残された摩衣様のお世話をいたしました。摩由姫様が亡くなって間もなく、摩衣様もお亡くなりになりました」
「そうなの……、摩衣が死んだのは、多分あなたたちのせいじゃないと思うわ」私は率直に思ったことをいった。

「お慰め^{なぐさ}ありがとうございます——。私たちは誰にも気づかれないうように、摩衣様のご遺体を処分いたしました。そしてその後で、この部屋を隠すために、壁の中に塗りこめました」大河原氏はちよつと黙りこむと、顔を上げて訊ねた。「ところで、お嬢様はいつから摩衣様が亡くなっていることにお気づきあそばされたのですか？」

私は大河原氏にちらっと目をやった。「あなたがいったじゃない。摩帆が長女で、私が次女、そして摩奈が三女だって——。でも摩由姫の遺言では、摩奈は四女ということになっていた……。遺言執行人の松川弁護士が、摩衣の生死を知っているとは、ちよつと考えられなかった。一方で、あなたは私を高崎ホテルまで迎えに来ている。当然、あなたは、私の存在の情報を松川氏から聞いたことになる。だとすれば、同時に摩衣についても、松川氏から何か話がなされているはずよね。それなのに、あなたは私たちが四姉妹ではなく、三姉妹である——と断言したわ。どうして？　つまり、あなたは松川氏からの情報のほかに、まだ何かを、摩衣に関して知っていたことになるのよ……」

「さようでございますか。でしゃばった質問をお許してください」大河原氏は頭を深く下げた。

「ありがとっ、もう下がっていいわ」私は彼を部屋から追い出した。

さて、この部屋の中に必ず、摩由姫が後継者に向けて残したメッセージがあるはずだ。なぜ、摩由姫は四人の娘を戦わせるように仕向けたのか？　なぜ、摩由姫は自分の研究が忙しくなった時に、身籠ったのか？　なぜ、摩由姫と私たち姉妹の容姿がこんなに酷似しているのか？　姉妹同士が酷似するのはまだ理解できるが、母娘がここまで酷似しているのは、やはりおかしい。父親の遺伝子も半分取りこんでいるはずなのだから……。

そうなのだ！　これらの事実はある一つの研究分野を示唆している。医学博士である才女、五月女摩由姫が、全身全霊を打ちこんで取り組んだ研究を……。

「あつた、これだ！」　ついに私は、摩由姫の大きな革表紙の日記帳を見つけ出した。

即座にその内容を、私は読みはじめた。

***年十月一四日

いよいよ私の計画が実現可能になった。代理母は七人、すでに確保してある。いずれも、健康面では申し分ない。

***年十二月二日

私の細胞核を移植した未受精卵は、電気刺激を加えた後、予定通り順調に分裂を行っている。明日から、いよいよ代理母に順番に移植していく。果たして、上手くいくのだろうか……。

***年二月七日

流産。（代理母一）

***年七月二十九日

第一子、誕生。（代理母四）母子ともども健康。摩帆と名付ける。

**年八月三日

第二子、誕生。（代理母六）母子ともども健康。摩耶と名付ける。

**年八月四日

第三子、誕生。（代理母五）未熟児。摩梨と名付ける。

**年八月六日

第四子、誕生。（代理母二）未熟児。摩衣と名付ける。

**年八月八日

第五子、誕生。（代理母七）母子ともども健康。摩奈と名付ける。

**年八月十日

第六子、誕生。（代理母三）奇形があり未熟児のため廃棄処分。

**年八月十九日

摩梨（第三子）が死亡。廃棄処分。

日記にはこの後の経過も生々しく記述されていた。

医学博士、五月女摩由姫の専門の研究分野はクローン技術だった。そして、彼女はその技術を自らの肉体に応用したのだ。私たちは、摩由姫の娘ではなくて、摩由姫の肉体のコピー、すなわちクローンであつたのだ。その目的は……？ 私には何となく理解できるような気がする。才能と美貌に恵まれた五月女摩由姫――。才能は何十年も維持できるが、美貌が維持できるのはせいぜい十年だ。彼女はその両方を維持したいと考えたのだ。美貌の永遠の維持……。そして、自分の研究しているクローン技術。

しかし、たとえクローンの製造に成功しても、その個体が無事に成長してくれるとは限らない。そこで、彼女は複数の個体の製造に着手した。生まれて間もなく生き残った四人を、一卵性の四つ子と

いう設定にして育てた。

彼女が危惧したのは、そのクローンがきちんと自分自身に成長するのか、という心配だ。先天的な要素は全く同じだ。遺伝子が同じなのだから。しかし、後天的な要因、つまり、成長の過程における環境の違いによって、摩由姫とは人格が変わってしまうという怖れがあった。そこで彼女は、敢えてクローンのひとり、ほかのクローンとは別の環境で育てるという選択をした。それが、私——摩耶であつたのだ。

そして、無事に成長したクローンの中から、もっとも強い者を自分の後継者として選び出す。永遠の才智と美貌の継続のために……。

摩由姫の日記の最後は、こう綴られていた……。

月日

この日記を手に行っているということは、あなたは私の正統な後継者なのだ。そこで、あなたにお願いする。あなたは私の類まれなる^{たくい}遺伝子を継承した私自身であり、私の才能と美貌を兼備した人格である。

あなたには、今日から五月女摩由姫を名づけることを許可する。そして、永遠の智と美を継続するプロジェクトを進行させる使命を与える。方法については別書に詳しく記してあるので、あなたの才智を持つてすれば、計画の執行は十分に可能であろう。

一つだけ……、おそらく心配するまでもないだろうが、忠告しておく。もし、あなた以外のクローンが、オリジナルも含めて、まだ生存しているならば、即刻、処分してしまいなさい。それらの存在は、計画の大きな障害になりますからね。

とにかく、こうして私は生き残った。私以外のコピーは、オリジナル（すなわち、五月女摩由姫本人のこと）も含めて全員が死亡し

ている……。

ところで、私は一体誰なのだろう？ 錦織摩耶——？ 五月女摩耶——？ 本当に私は摩耶なのだろうか……？

かつて、摩帆と摩奈が食堂で入れ替わったように、私と誰かが入れ替わっていないという保障はどこにもない。ひよっとしたら、私が摩帆で、私に刺された娘が摩耶だったのかも知れない……。だんだん、自分の記憶は曖昧あいまいになっていく。しかし、はつきりしていることが一つだけある。私は五月女摩由姫になれたのだ！

あれから一年の歳月を経て、私はあざみ館で平穏に暮らしている。私の名前は五月女摩由姫——。年齢は公開こそしないが、五十歳ということになる。

摩帆、摩耶、摩奈という名の三人の娘は、そもそもこの世にいなかったのだ。彼女たちの戸籍は、はじめから存在しない。そして、摩由姫の死亡届も、未だ提出されてはいない。あざみ館には五月女摩由姫という美しく聡明な女性が、ひとりで生活していたに過ぎない……。

あざみ館……。考えてみれば、美しく棘のある花——あざみは摩由姫のイメージにぴったり合う気がする。

私はふと思う。あまりにも自分に酷似している他人の存在を否定することは、そもそも人間の本能にインプットされているのかもしれない。初代の五月女摩由姫は、遺産を餌えさにはしたものの、それだけでなくもクローン同士で生き残りを賭けた殺し合いが生じることは、確信があったのではないだろうか？ それゆえに、自分自身も殺される可能性があるから、早々に遺言状を製作した。そして、私たちが二十歳になるというタイミングで遺言の公開を行うことにより、コピーが複数生き残ったとしても、お互いの殺し合いが助長されるよう仕向けたのだ。五月女摩由姫の後継者は、ただひとりでな

ければならないのだから……。

私は初代がした行為を絶対に許すことはできない。私たち姉妹の尊厳を無視した鬼畜的な行為を……。

しかし、今の私には、そんな思いを逸脱した壮大な使命が課されている。人類全体の利益に繋がる重要な実験の継承——、もはやこれは、個人的な感情に走ってはいけない状況なのだ。正統な二代目五月女摩由姫として、やらなければならない重い責務がある……。

私の眼前には七本の試験管が並んでいた。それぞれには七つの卵子が入っている。すでに私の細胞核の移植は済んでいた。後は、細胞の融合を誘発させるだけだ。

細胞に電気刺激を加える装置の起動スイッチに、美しくしなやかな私の手の指先が、そつと伸びていった……。

（完）

9 ・ 日記（後書き）

ぶっちゃんコメント

今回は、二年前に書いた作品を、リニューアルしてみました。手直して二ヶ月も費やしてしまいましたが、文章は以前よりは納得できるものになりました。

この作品に対する皆さんの感想をお待ちしております。

次回作も頑張りたいと思います。長い文章をお読みいただいて、ありがとうございます。

i r i s G a b e

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6189i/>

あざみ館の三姉妹

2011年10月4日21時18分発行